

# 後悔喚起コミュニケーションが意思決定に及ぼす影響

TPP（環太平洋戦略的経済連携協定）参加に対する意思決定を題材として

○上市秀雄<sup>1</sup>・関沢洋一<sup>2</sup>（非会員）

<sup>1</sup>筑波大学システム情報系・<sup>2</sup>独立行政法人経済産業研究所

キーワード：後悔，説得的コミュニケーション，意思決定

The effects of regret arousal communication on decision making

Hideo UEICHI<sup>1</sup>, Yo-ichi SEKIZAWA<sup>2#</sup>

<sup>1</sup> Faculty of Engineering, Information and Systems, University of Tsukuba, <sup>2</sup> RIETI.)

Key words: regret, persuasive communication, decision making

## 目的

相手の態度や行動を特定の方向に変化させる方法として、説得的コミュニケーションがある。特に不安や恐怖喚起は有効な方法の一つである。しかしながら感情には、不安感・恐怖感のみならず、機会損失に対する感情、後悔などもある。特に個人の意思決定においては、“後悔”が最も重要な規定要因の一つである（e.g., 上市・楠見, 2000; 2006）。

本研究では、TPPを取り上げ、情報を提示するとき、後悔、恐怖（漠然とした不安）、機会損失（ベネフィットを失う可能性）などの感情を喚起させる表現の違いによって、情報提示前と後とで、個人の認知や態度がどのように変化するかを検証し、どの感情喚起表現が有効であるかを明らかにする。

**仮説：後悔を喚起させる情報を提示した方が、他の感情を喚起させる情報よりも、認知や態度を変化させる**

## 方法

**実験手続き** 下記質問紙を、2013年6月第2週に1回目、第3週に2回目を実施した。両方の質問紙に回答した参加者は、133名（男性105名、女性28名）。

**1回目の質問項目 TPPに関する知識** “日本の貿易自由化はTPPが発足する前から、FTAやEPAで行われていた”、“FTAやEPAと異なり、TPPでは例外品目は認められないこと”など5項目を、7段階で評定（1:知らなかった～7:知っている）。

**TPPに対する認知** 不安感・リスク認知に関する5項目（例：TPP正式参加に不安を感じる、TPPに正式参加すると国内企業がダメになる）。機会損失5項目（TPPに正式参加しないと経済発展する機会を失う、世界経済をリードする機会を失う。ベネフィット認知5項目（TPPに正式参加すると平均所得が増える、今よりも豊かな生活ができる）。参加しておけばよかった後悔5項目（TPPに正式参加しなかったが、日本経済は発展した、しかし参加国ほどは発展しなかった場合、参加しておけばよかったと後悔する）。参加しなければよかった後悔4項目（TPPに参加したので安い農作物が輸入できた。しかし日本の農業はダメージを受けてしまった場合、参加しなければよかったと後悔する）。上記項目を7段階で評定（1:あてはまらない～7:あてはまる）。なお上記要因は、因子分析（最尤法、promax回転）で確認済み。

**TPPに対する賛否態度** “TPP交渉に参加すること（2013年6月時点では、7月にTPP交渉参加がほぼ確実であるという注釈入り）”、“TPP交渉の結果、日本が主張する例外品目が認められる場合にTPPに正式参加すること”、“TPP交渉の結果、例外品目が認められず全ての品目が自由化される場合にTPPに正式参加すること”、それぞれに対して、7段階で評定（1:反対である～7:賛成である）。

**2回目の質問項目** 1週間後に、TPPに対する感情を喚起させる3つの条件（後悔喚起群、機会損失喚起群、不安感喚起群）と統制条件（感情を喚起するような文言無し）の4群に参加者をランダムに分けて、それら条件文を読ませた。

**条件文の例：後悔喚起文の一部**（下線部分が各条件で異なる）もし日本がTPPに正式参加しなかった場合、TPP参加国と比

較して、日本の輸出を増やし、日本経済も成長させ、国民の所得を増やすことが難しくなると思われます。このようになってしまつて「あのときTPPに正式参加しておけばよかった」と後悔したとしても、手遅れとなっていると思われます。このように正式参加しないと、後悔する可能性があります。

**TPPに対する認知、および賛否態度** 条件文を読ませた後、1回目と同様の項目を測定した。

## 結果

**コミュニケーションがTPP認知に及ぼす影響** TPPに対する認知の各要因の下位項目の合計値の平均を従属変数、4条件を独立変数として、繰り返しのある分散分析を行った。その結果、ベネフィット認知に関しては、条件と時間の交互作用（ $F(3, 126)=2.681, p=.050$ ）が認められた。これは、TPPに参加しないことによって生じる後悔を喚起させると、TPPに参加することによって得られるベネフィットを高く評価するようになることを意味している。不安感・リスク認知に関して、条件と時間の交互作用（ $F(3, 129)=4.325, p=.006$ ）が認められた。これは、TPPに参加しないことによる機会損失の情報を与えられると、TPP参加リスクや不安感が、情報を与えられる前よりも低下することを意味している。参加しなければよかった後悔に関しては、交互作用が有意傾向だった（ $F(3, 129)=2.321, p=.078$ ）。これは、参加しないことによる後悔を喚起させると、参加しなければよかったという後悔を下げることを示唆している。

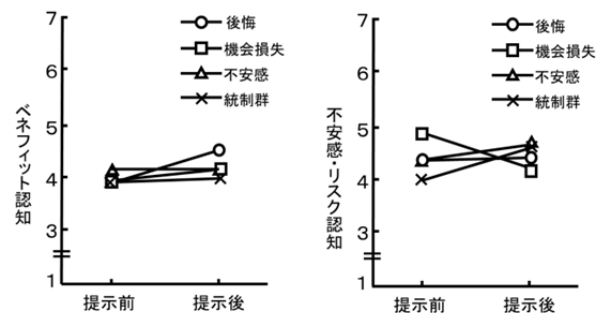


図1 各コミュニケーションが認知要因に及ぼす影響

**コミュニケーションがTPP賛否に及ぼす影響** TPPに対する参加意向の3項目それぞれを従属変数、4条件を独立変数として、繰り返しのある分散分析を行った。その結果、TPP参加することに関して、交互作用（ $F(3, 128)=4.835, p=.003$ ）が認められた。これは、統制群（TPPの説明のみ）はTPP参加反対、他の3条件群は賛成へ変化することを意味している。

## 考察

本研究の結果より、後悔喚起や機会損失喚起は、不安喚起より、認知を変化させ、説得効果も高いことが示された。今後は他の文脈においても検証する必要がある。

## 引用文献

上市・楠見(2000).後悔がリスク志向・回避行動における意思決定に及ぼす影響,認知科学, 7(2), 139-151.  
上市・楠見(2006).環境ホルモンのリスク認知と回避行動.認知科学, 13, 32-46.